

## 国王逝去

慎太郎は、イブラヒムが急に慌しくなっていることに気がついていった。

植木も、パリ、ウィーンなどへの出張が多くなりレジデンスを留守にすることが多く三人で石油談義をする時間とれなくなっていた。

イブラヒムはお気に入りのプールにも来なくなっていたので、たまたますれ違う時に立ち話をする程度だった。

「イブラヒム、忙しそうだね。先物の方は大分儲かっているんじゃないかい」

慎太郎はレジデンスの一階のただっ広い廊下で久し振りにイブラヒムを見かけ声を掛けた。

この薄いピンクの大理石が敷き詰められた廊下の片側は総ガラス張りの窓、片側は薄水色に塗られた石壁となっていた。そして天井は二階くらいの高さがあり薄いピンク色に塗

られていた。廊下には一定感覚でピンクの大理石の仕切りが置かれていて周り中に高級感が漲(みなぎ)っている。

灼熱の陽射しはガラスにその勢いを僅かに和らげられながらも内側深く射し込み薄水色の石壁、ピンクの天井、ピンクの大理石を眩しく照らしていた。廊下の両端にあるエレベーターホールは最上階の五階まで吹き抜けになっていて、その高い天井からは豪華なシャンデリアが吊るされていた。

「やあ、シントロウ、久しぶり。元気そうだね」、

「そう、大分儲かっているね。こんなに早く原油価格が五〇ドルになるとは思っていなかった。植木さんには悪いけど、こここのところの展開には笑いが止まらない。今また新しいチャレンジをしようと思っているところさ」

イブラヒムは至って愉快そうだった。そして、余程嬉しかったのだろう。つい口を滑らせたようにしてシントロウのために貴重な情報を提供した。

「ところで、サウド国王の入院は既に二カ月近くなった。僕にはサウジ政府が発表していた検査入院というのが疑わし

く思えて仕方がなかった。それに、八三歳という高齢での、このような長い入院は腑(ふ)に落ちないし、シントロウにも頼まれていたので必死で僕のネットワークを使ってその真相を調べていたんだが、たまたま国王が逝去したらしいという怪情報を入手してね、

「日本政府は情報収集力が高いからサウド国王逝去に関して何か正確な情報を入手しているんじゃないの」

“国王逝去”、慎太郎は耳を疑った。国王の長い入院を誰もが訝しく思っている。逝去しても全く不思議ではない。誰もが躍起となってその確証を追い求めている。

怪情報という表現を使っていたがイブラヒムは国王逝去の正確な情報を掴(つか)み、それとなく教えてくれたに違いないと慎太郎は思った。

「イブラヒム、僕は民間人だから政府内のことは良く分からない。林公使は、そのような情報を知っているかもしれないけど・・・ただ、例え知っていたとしても僕に言うようなこととはないよ、」

「そうだね、イブラヒムの言う通り入院が不審に思えるくらい長くなったね。ここのところ新しいニュースも出て来ないし……しかし、国王が既に亡くなられたというなら、何故それを発表しないんだろっね。まあ、何かが進行中かも知れないということは想像出来るがね」

イブラヒムは、にやりと笑うと慎太郎の声を後に別れの挨拶をして忙しそうにエレベーターホールの方に去っていった。

慎太郎は、すぐに石渡に電話を入れて国王逝去の怪情報を伝えようと思ったが、生憎日曜日で日本では会社が休みであることに気付き思い止まった。今のところ石渡の自宅に電話を入れるようなたぐいの情報でもない。

そして、さらに調べてみることにした。まず、五月以来ずっと連絡がとれなくなっていたスルタンに電話をしてみたが相変わらず通じなかった。

仕方が無いので思い切ってスルタンの家に行ってみることにした。

前にモスクに連れて行かれた時に、スルタンからモスクに近い彼の自宅を教えてくださいだったので近くに行けば分かると思っただけのもの、いざ行くところとすると慎太郎の記憶は曖昧(あいまい)だった。しかし、運転手のオスマは職業柄鮮明に覚えていた。オスマにとっては当然のことだった。まともな地図が手に入らないサウジでは、しっかりと頭の中に憶えておく他は無い。

慎太郎の乗った車はモスクの脇を通り、そのワンブロック先の通りを左折すると緩い上り坂を登った。ちよつと走ったところで坂の途中にあるスルトンの家の前に着いた。

家からは、さつき通り過ぎたモスクの尖塔(せんとう)が見えた。尖塔の先には、三日月の飾りが付けられていた。その先の夜空には月が白く輝いていた。月明かりに照らされたスルトンの家は、日本の家と比べれば大きいが、地方豪族の子息の家としては質素なものだった。派手な外灯もない。スルトンらしい作りだった。

慎太郎は門に付いている呼び鈴を押した。応答が無かったのもう一度押したが、また応答が無かった。

出かけているのかもしれないと帰ろうとした時にスピーカーから声が流れて来た。

「はい」

間違い無くスルタンの声だった。

「今晚は。スルタンだね。慎太郎だよ」

すぐに慎太郎はスピーカーカーフォンに向かって言った。

「はい」とだけ応えて自分の名前を言わなかったのは用心深いスルタンらしかった。

スピーカーからの応答は無く、いきなり玄関が開く音が聞こえた。そして、重々しい大きな門が開くと、そこには月明かりに照らされたスルタンの笑顔があった。

「やあ、シンタロウ、オスマ、良く来たね」

そう言うとスルタンはアラブ式に慎太郎の首の左にその首を合わせ、そして次に右に合わせながら慎太郎を抱き締めた。

「まあ、入りたまえ」

突然訪問した慎太郎に対し不快感などは全く示さずさりとしてそう言った。スルタンは突然知らない人を連れて慎太郎をよく訪れた。自分がそうだったから他人の突然の訪問も全く気にしなかったのではないかと慎太郎は思った。きっと悪気(わるぎ)の無いおおらかな性質(たち)なのだろう。

「スルタン、久しぶり。元気そう良かった。オスマには外で待っていてもらおうかと思う」

と慎太郎が言うと、スルタンはオスマの方に向き笑顔で軽く頷いた。慎太郎はオスマに車で待機するように言って中に入った。オスマには万が一慎太郎に何かあったら、すぐに支店関係者に連絡を取るよう予め伝えてあった。慎太郎はスルタンを完全に信用したかったが、心のどこかにそう思い切れないものがまだあった。

玄関ホールを抜け居間に入るとスルタンはそこに居た弟のカリムを慎太郎に紹介した。スルタンはカリムが世界最大の石油会社であるサウジアラムコに今年入ったばかりだと

さらりと言ったが、慎太郎はそれがカリムが相当に優秀であることを意味していることを良く判っていた。

今やサウジの中でサウジアラムコの人気は絶大で入社試験は最難関だ。そもそも学業成績が全科目九〇%以上でない  
と試験すら受けられない。その最難関を突破したのだからその優秀さはお墨付きだ。

あの石油省次官のプリンスの力を使えば入社はより容易  
だったかも知れないが慎太郎にはスルタンがそのようなことをする人間とは思えなかった。

スルタンと比べると随分と瘦(や)せているカリムは気後  
れ気味ながら精一杯の笑顔で慎太郎に挨拶をした。

痩せているせいかな慎太郎にはどこことなくスルタンよりは  
小振りのように見えた。腺病質(せんびょうしつ)とまでは行  
かないが弱弱しい感じに写った。ただ、今年アラムコに入っ  
たということだったからその前に猛勉強をしたせいかもしれ  
ないなどと思っていた。

眼鏡はかけていなかったが兄弟らしく顔はスルタンに似



たところもあつた。しかし風貌(ふうぼう)はスルタンがネジドのエリートのように見えるのに対しカリムはアシル伝統の色が濃いという具合に全く異なっていた。

また、その風貌からは沙漠のサソリの統領、月の欠片などとはとても想像は出来ない。

二〇畳程の居間兼客間の床は大理石が敷き詰められていて、周りの壁、天井は白く塗られていた。天井からは金色のシャンデリアが下がっていた。そこに真っ白なトープ服姿の二人が居るといふいかにもサウジらしい光景を慎太郎は眩しそうに眺めていた。

そして部屋には芳しい香木の香りが漂っていた。

カリムは、テーブルの上に置かれている香炉に新たに香木を足し、そして金色のアラビア式のポットを持って奥の部屋に去って行った。

「慎太郎、今日は何事だね」

「五月二七日からスルタンの携帯電話に連絡が付かないの

で随分と心配してね。今日は思い切って様子を見に来たんだ。一体どうしていたんだい」

「そうか、済まない。あの携帯は壊れたもんだから取り替えただ。慎太郎には新しい電話番号を知らせていなかったかな。ご免、ご免」

スルタンは、悪びれもなくそう言ったが、慎太郎は、それはその場しのぎの嘘(うそ)だろうと思っていた。あれだけ頻りに電話をかけてきていたスルタンが慎太郎に新しい電話番号を知らせるのを忘れたというのは信じ難い。

きっと、国王の入院に関連した話をするのが嫌だったに違いない。話せば根が正直なスルタンは慎太郎に何か喋らざるを得なかったかもしれない。

スルタンとの阿吽(あうん)の呼吸でそれを更に質問するようなことはしなかった。

「サウド国王死亡のニュースが流れて暫らくたってから、サウド国王が緊急入院したよね。スルタンなら何か知っているかと思って何回も電話を入れてみたんだ」

「そうか、私もサウド国王の入院には心配していてね。国王

は八三歳と高齢だし多くの病を抱えていたので、いつ亡くなられてもおかしくない状態だった。仮に死亡ということになれば、常識的にはサード皇太子が国王になりトルキ第二副首相・航空国防相が皇太子になると言われている。しかし、トルキ航空国防相の属するハイル家はパワフルですんなりそのようになるのかどうかは分からない。また、誰が第二副首相になるかも不明だ。王族間の軋轢(あつれき)が生じる可能性もある。サード皇太子は、王位継承問題に関する改革案を国王に提出していたから余計微妙なところがある。ただ、騒乱になるようなことは決して無いと思う。この国は保守的な人が多いし全て話し合いで解決される。すべて水面下での折衝さ」

慎太郎には王位継承問題が有力な地方豪族にとっても大問題と思われたので、スルタンの、この、まるで海外のアナリストのような第三者的な発言が腑に落ちなかった。

「ところで、今回、急に駐英大使だったアブドルアジズ殿下が呼び戻されたようだけど、王位継承問題に何か関係がある

のかな」

この慎太郎の質問にスルタンは少し動揺したようだった。そこにすかさず慎太郎はたたみこんで言ってみた。

「それに、既にサウド国王は逝去したという極秘情報もあるけど……」

スルタンは驚いて慎太郎の目をじっと見つめた。

「……」

スルタンが何か言いかけたところでカリムが、さっきのアラビアン・ポットを持って帰って来た。

ポットの口からは湯気が上がっていた。慎太郎のためにアラビアン・コーヒーを煎れて来てくれたのだ。慎太郎がお猪口程度の小さいアラビア式の湯呑みを彼から受け取ると、カリムはそこにコーヒーを注いだ。カリムは二人の間の込み入った様子を察したのだろう。

「それでは、ごゆっくりして下さい。僕は、持ち帰った仕事があるのでこれで失礼します」

そう言うつとすぐに部屋を出て行った。

スルタンは、一息つけ落ち着いたようすでゆっくりと話を始めた。

「そうか、さすがにシントロウの情報網は凄いな。アブドルアジズの急な帰国まで知っているとは・・・彼は、次世代ハイル家の中核になる人物だしその影響力は大変なものだ。この数日間、王族内は大分慌しくなった」

そして、スルタンは思っていた通り慎太郎が王位継承問題に高い関心を持っていてこれまでに相当量の情報を収集していることまで知って、慎太郎の考えていた通り根が正直だったので親友である慎太郎のために自分の立場を淡々と話し始めた。

「私は、シントロウも知っている通りハイル家に属する石油省のプリンス・アブドルラフマンとも親しい。しかし、実はジャマル家に属するサード皇太子派でね。双方から協力を頼まれてはいたが悟られないように全力で強力なハイル家に属するプリンス達をサード皇太子派にするために説得に回っているところさ、」

「ハイル家には筆頭のトルキ第二副首相・航空国防相、ナイ

フ内相、サルマン・リヤド州知事と影響力の強いものが多いので放っておけばサード皇太子の立場が危うくなる可能性もある。僕の家はワッハーブの伝統を受け継いでいるからともともとサード皇太子に近いのさ」、

「ハイル家では第三世代のアブドルアジズが懸命にサード派の突き崩しに動いている。その第三世代では我が部族はワッハーブ直系のサウド外相に好意を持っている。アブドルアジズはこのサウド外相とライバル関係になるんだ」、

「しかし実情はより複雑で入り組んでいるんだ。アブドルアジズの夫人はサウド外相の妹だからサウド外相はアブドルアジズの義兄ということになる。また、夫人がニューヨーク同時多発テロのテロリスト関係者に資金援助したとの容疑が出た時にアブドルアジズは上手くその容疑を晴らすことが出来た。ファイサル一族に恩を売っていることになる。アブドルアジズは手強い相手なんだ」

慎太郎はスルタンが率直にサード皇太子派と言ってくれるとは思っていなかった。

確かにスルタンの言う通り彼の家系、彼のこれまでの言動

からすれば最も妥当な立場なのだろうが、慎太郎はこれもスルタンが言った通りハイル家に属するアブドルラフマン石油次官とも親しかったことを知っていたので、慎太郎はこれまでずっとスルタンがハイル家を支持しているものと思っていた。次世代のホープであるアブドルアジズに対し手強い相手と表現したスルタンは一体どのような重要な地位にあるのだろうか。

慎太郎は改めてスルタンの顔をまじまじと見た。

懸命にサード皇太子の国王即位に向けてハイル家と交渉を続けているとスルタンは言ったが一体何をどのようになさっているのか慎太郎には皆目見当もつかなかった。

「僕は、サード皇太子の国王昇格、第二副首相の皇太子昇格は全く問題無いと思っていた。スルタンの話を聞いていると、これまでの海外からの懸念が満更でもなかったように思えてくる」

そして、慎太郎は少しはスルタンの助けになるかと思ひ、

思い切って言うてみた。

「ところで、どうやら、アブドルアジズ殿下は、石油先物に手を出しているようだね」

スルタンの顔は、一瞬、強張った。

「慎太郎は、そんな情報を一体どこから入手したんだい。そんなことはあつてはいけないし、そんなことをする必要もない筈だ。実態経済と遊離した先物取引はコーランできつく禁止されている。駱駝を売る時には、その胎内にいる子駱駝の価値を見越して価格付けをしてはいけない。ロイヤルファミリーは十分に恵まれている筈で彼らは貧しき人々を考え高潔な考えに基づいて行動すべきだろうと思う。決して貪欲であつてはならない」

「私は、今、アブドルアジズの周辺をいろいろと調べているところだ。相手を説得する時にはこちらもちり札を持たないといけないからね」

スルタンは、既にアブドルアジズとの折衝を始めているよ  
うな口ぶりだった。今や慎太郎はスルタンが意識的に慎太郎との連絡を絶つたものと確信していた。



翌七月二〇日、サウジ外務省はアブドルアジズ殿下が駐英大使を辞してリヤドに戻ったと発表した。

これを聞いて慎太郎はスルタン、イブラヒムの情報入手の早さ正確さに改めて舌を巻いた。

そして、国王逝去の情報もほぼ間違いないだろうと思った。慎太郎は、二一日、東京の石渡のみに極秘情報としてそれを連絡した。

石渡は極秘情報として取り扱うから心配しないようにと慎太郎に言い、引き続き新しい情報があつたら教えて欲しいと慎太郎に頼んだ。その時に石渡は国王が交代してもアリ石油相が留任することを祈っていると云った。もちろん、慎太郎もそう願っていた。

慎太郎はスルタンから国王逝去を確かめることは出来なかったが、それは当然のことだと思っていた。しかしスルタンはサード皇太子の即位に向けて調整をしていると言ってくれた。これでやっとサウジ政府が国王逝去を発表出来ない理由も呑み込めた。世間が考えるよりは皇太子の国王昇格は

簡単なことではないということだろう。どのような調整かは知らないが、少なくとも皇太子の属するジャマル家と航空国防相の属するハイル家が王位を巡って対立していることは確実だと思われた。

レジデンスに戻った慎太郎は、浮かない顔をして歩いている植木の姿を見つけた。

「こんにちは、植木さん。どうしました。浮かない顔をしていますね」

「やあ、池波さん、お久し振りです。実は、この半年間の勤務で国際石油・ガスフォーラムにつくづく嫌気がさしてきたんですよ。事務レベルの最高意志決定機関である理事会でそれを嫌という程思い知らされました。まあ、私の思い入れが強すぎたのかもしれないが・・・」

「植木さん、お時間があれば、私の部屋で少しお話を聞かせてくれませんか」

慎太郎は思いがけない答えに植木のことか心配になってそう誘ってみた。

日本に居た時には、よく仲間の仕事の愚痴を居酒屋などで聞いて憂さ晴らしに協力したものだ。このリヤドでは、そのようなことは出来ない。慎太郎のかけた言葉で植木は少し元気になったように見えた。慎太郎の部屋は植木と同じ階にあったが、これまで植木を自宅に招いたことはなかった。

「お邪魔します」

と言って慎太郎の部屋の中に入り植木は慎太郎のレジデンスの中を見渡した。見るとはなしに植木の目にはダイニングテーブルの上に置かれたアラビア式の香炉が写った。

「池波さん、ダイニングテーブルの上にアラビア式の香炉が置かれていますね。香木でも焚かれていらっしやるのですか」

植木は興味深げに訊ねた。

「ええ、昨年アリ石油相のディナーに呼ばれた時に、インドの香木が焚かれ、その煙と匂いが忘れられなくなってしまったんです。宜しければ焚いてみましょうか」

そう慎太郎が応えると植木は恐る恐る言った。

「香木は高いのでしょうか・・・」

最初はそんな風に躊躇していたが植木は好奇心にかられ直ぐに慎太郎に頼んだ。

「そうですね、それでは、お言葉に甘えて遠慮なくお願いします。済みません」

慎太郎は、香炉に銀色にコーティングされた二センチ四方程度の大きさの無煙、無臭の炭を置き、それに小型の電子ガスバーナーで火をつけると、ほのかに赤くなつた炭の上に小さく切り刻まれた香木を載せた。少しずつ青白い煙がゆらゆらと上がり、みるみるうちに芳しい香りが辺り一面に漂い始めた。

「植木さん、今、手元にある一番良い香木を焚いてみました。これはインドからのものです」

慎太郎は香炉を植木に手渡しながら言った。

「煙を見ているだけで、なんとなく幽玄な感じがしてきます。そして、この香りはまた素晴らしいですね。昔、京都でこの

ような香りを嗅いだような気がします。お蔭様で気持ち落ち着いて来ました」

植木は大分香木の香りが気に入ったようだった。

そして、考えが整理出来たのか静かに話し始めた。

「池波さん、私は身の危険を感じるこのサウジに敢えて夢を持ってやって来たのです」

そうぽつりと言った後、堰を切ったように植木の言葉は続いた。

「私は、これまで仕事で、原油需給、原油価格についての資料をまとめ、雑誌に寄稿をしたりマスコミにコメントを出したりして来ました。その中で、原油価格を見る際のポイントの一つとしてOPECにも注目して質問にも答えたりしました」

「私はいわゆるOPECウォッチャーの一人だったので。その時、説明をしながら世界の原油需給に関する統計が不備であることを痛感していました。前にもお話しさせて頂いた通り今回私が勤めることになった国際石油・ガスフォー

ラム事務局はこの世界石油需給統計の整備を進めるのが大きな仕事の一つだったのです。それで、お話が来た時にはまさに適職、これまでの仕事の総仕上げになると思ったわけなのです」

植木は、部屋中に漂っている香木の幽玄な香りの中で慎太郎が出してくれたマリアージュ・フレール製の紅茶・マルコポーロの甘い味、芳しい臭いを少し味わうと、話を続けた。

「二〇〇〇年にリヤドで開催された第七回石油・ガスフォーラムに出席した閣僚達の要請を受けて始まったこの整備事業は、市場の透明性確保という明確な目標を持っていました。しかし、なかなか進展が見られませんでした。一昨年の末にはこのリヤドに恒久的な事務局が設置されましたが、それ以降もその歩みは遅々としたものでした。私は市場の透明性確保という問題意識は十分にある筈なのに何故このように遅れていたのかと不思議に思っていたのです、」

「来てみて、その原因が良く分かりました。一つは、この統

計整備を専門家に任せきっていることでした。統計ですから統計専門家がこれを担当するのは当然のことですが、重箱の隅を突つくような議論が長い間続いていたのです。閣僚レベルの要請と実際の作業の間には相当のギャップがあると言つて差し支えはありません」、

「それならば閣僚レベルから圧力を掛ければ良いではないかと仰るかもしれませんが。閣僚レベルでは市場の透明性を向上しなければならぬと盛んに号令をかけ資金提供をしてはいるのですが、具体的な目標を設けるなどの完成に向けての手立てを講じてはいないのです。これでは遅くなるのも当然です。また、整備の中心となるIEA、OPECはと言えば、自分達の国際石油需給表の殻に閉じこもつてそこから出ようとはしないのです。これらの機関では統計専門家とアナリストとがバラバラに動いているということですよ」、

「また、世界石油需給統計をより正確なものとするためにはすべての石油データを収集対象とする必要があります。しかし、現段階では、例えば、生産について言えば、集めている対象は原油及び石油製品だけでNGL(天然ガス液)など

は含まれていません。これでは、総石油供給量が集計出来ないのです。その前に、現在集めている枠内でも提出していない国や項目があり収集が完全ではないのです。全く嫌になっ  
てしまいます」

植木は一息ついて、もう一度マルコポーロを啜った。

そして、また、続けて話し始めた。

「それに、市場の透明性確保のために統計の整備は必要と口にしてはいるものの、本当にこれを推進しようとしている人はいないと酷評する専門家がいたりするのです。どうも、私は、最近この見方は当たらずとも遠からずなのではないかな  
とと思っています」

慎太郎は、世界の石油需給統計を整備するのは大変なこと  
だとは思っていたが、植木の説明を聞いてその難しさをますます明確に実感できた。

「前にも仰っていた通り、もともと統計には誤差がありますから、その誤差を小さくするだけでも大変なことでしょう。その前にいろいろなプレッシャーがあっただけですね」



慎太郎もマルコポーロを啜った。

植木は慎太郎に気持ちを分かってもらったのが嬉しくて生来、愚痴などを言うのは好きな方ではなかったが、話を続けていた。

「そうなんです。それに加えて最近もつつくづく嫌になったことがあったのです」

もつとつくづく嫌になったこと？

慎太郎は植木の話に引き込まれていった。

「誰も今の異常な高原油価格に対する危機意識をもっていないことが分かったのです。特に、フォーラムのメンバーでもあるOPECの変節には落胆しました。私は、長い間OPECは高原油価格に懸念を持っていると思っていました。原油価格が高くなれば世界経済が影響を受け石油需要が減退する一方燃料代替が進みますから、高原油価格は長い目で見れば産油国のためにならないというような長期戦略を持っていると信じていたのです。ヤマニ元サウジ石油相もこれを再三警告してきました。ヤマニ元石油相は石器時代が石

がなくなつたから終わったのではないのと同じように、石油時代も石油を残したまま終了する恐れがあるとまで言ったのです。ところが、前回の理事会の発言を聞いて誰もそのような畏れを持っていないことが判明しました」

植木は、ここで一呼吸を置き、またマルコポーロを啜つた。

慎太郎は、植木の言ったヤマニ元石油相の言葉を頭の中で繰り返していた。

石器時代が石がなくなつたから終わったのではないのと同じように、石油時代も石油を残したまま終了する恐れがある

石油時代が終了となれば植木の進めているプロジェクト  
Kも無意味になってしまう。それは堪らない。

「植木さんはーE A本部のあるパリに行ったりO P E  
C本部のあるウィーンに行ったりで、随分と楽しまれて  
いるのではないかと思つていたのですが、そんな悩みがあつ  
たんですか。植木さんも大変ですね」

慎太郎が慰めると植木は溜め息をつきながら更に続けた。

「私は、理事会で最近の原油価格の高騰振りを説明して、次回カタール・ドーハでの国際石油・ガスフォーラムでこの問題を取り上げ、対処しないと世界のマスコミ、世界の人々から見放されるのではないかと訴えました。すると、ある産油国の大物理事が高い原油価格に困っているものは誰もいないと発言したのです。これには落胆するというよりも呆れてしまいました。何だか、現在の高価格が是正されない原因の一端を覗いてしまったような気がしました」

植木はがっくりと肩を落とし、うなだれていた。

慎太郎には植木の一途さが気の毒に思えて仕方が無かった。組織内にいると様々な不満が生じることもあるとは思っていたが慎太郎は植木のために敢えて正論を言ってみた。

「そうだったんですか。植木さんが感じられている通りに最高意志決定機関に高値に対する認識が欠如しているとすれば、高値を抑制するための市場の透明性確保という根本的な方向性と整合性がとれなくなってしまうのではないでしようか」

慎太郎のこの言葉に励まされて、植木は頭を上げ再び話し

始めた。

「ええ、まさしくその通りなんです。私は、それが、前に言った統計整備の遅れにも大きく影響しているのだと思っています。困ったものです。それで良いわけはありません。及ばずながら、まるでドンキホーテのようですがもう少し頑張ってみて見たいと思います」

ドンキホーテのところで笑顔を見せながらそう言った。

「今は石油市場が需給のファンダメンタルズを離れて動いていると思いますが、何時の日か主に需給のファンダメンタルズで価格が決定される健全な市場に戻るでしょうか、その時までには統計整備が終るよう頑張ってみます」

植木の言葉には力強さが戻っていた。

二〇〇五年八月一日、慎太郎が逝去を確信した日から一日後、ようやくサウジ王室はサード皇太子の名前でサウド国王の病気による逝去を正式に発表した。

さらに、同日、王族がサード皇太子に対し新国王としての忠誠を誓ったこと、トルキ第二副首相・航空国防相を皇太子

に選んだことを発表した。

慎太郎はスルタンのお蔭でこれが王族内の長い調整の結果であることを充分にわかっていた。そして、それはサード皇太子の国王就任を推進していたスルタンの努力が実ったものであることも意味していた。慎太郎は、一体どのようなにして、そしてどこまでスルタンが主流派を説得出来たのだからかと興味深々だった。そして、スルタンのロイヤルファミリーに対する係わりの深さをひしひしと感じていた。

この時には、そのスルタンの努力が結局アブドルアジズの反発を買い、スルタン、慎太郎そしてイブラヒムまでがその影響を受けることになるなどとは思ってもよらなかった。

原油価格は、そのような長い調整の結果とは係わりなく、サウジ王族内の内紛懸念が国際メディアで大々的に報じられたこともあってバレル当り六一・五七ドルへと急騰した。さらに翌二日には、アリ・サウジ石油相が減産を臭わすような発言をして六三・八九ドルまで続伸してしまった。

イブラヒムの思惑は当たった。これでイブラヒムはジャックポット(大儲け)を得ることが出来た。

八月三日にはサウド前国王の葬儀が行われサード国王が国民に対し国王として最初の演説を行った。